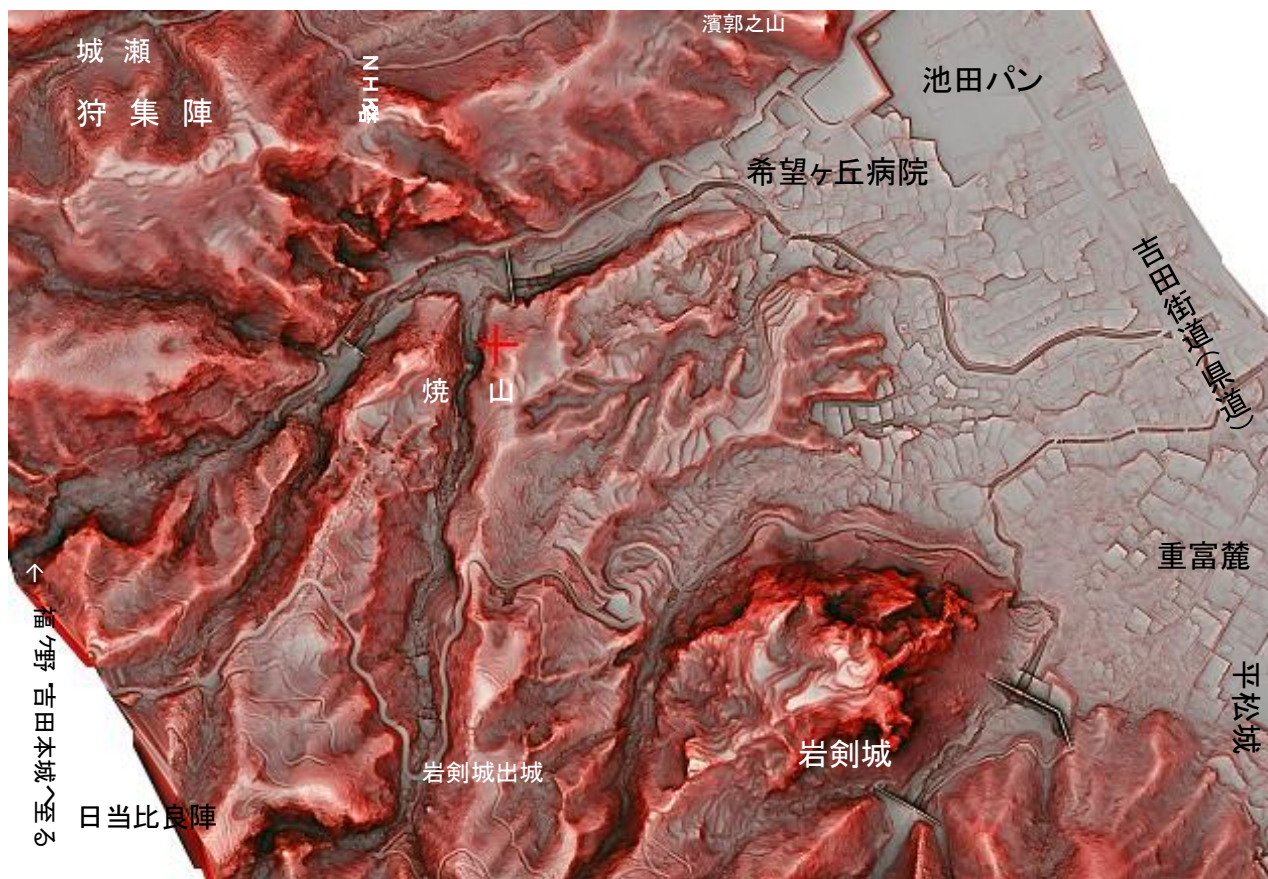


見学会「狩集陣跡」説明資料 R7.12/14(日) 始良市平松



図2 狩集陣跡周辺見取図



1. 民俗地名「狩集」

狩集とは中世の狩猟の集合場所につけられた民俗地名である。狩猟の際の集合し、役割を確認したり、獲物を分配したりする場所であったという。集落に近く、狩猟場の入口にあたる場所が多い。今回の狩集陣もそのような麓に近い尾根上にある。『角川地名大辞典 46鹿児島県』によれば、県内では南さつま市や日置市を中心に16か所の小字地名「狩集」が確認できる。

2. 岩剣合戦時の山城配置

第1図の分布図は、戦国時代の16世紀中頃の岩剣城攻防戦に関わる山城の配置図である。蒲生・祁答院連合軍は、蒲生城を本城として中心に置き、枝城(支城)として、北に松坂城を、西に北村城を、東に帖佐平山城を、南に最前線基地の岩剣城を配置していた。

鹿児島郡はじめ南薩地方をまとめ上げた戦国島津氏は、いよいよ本格的に三州統一に動き出す。その最初の相手が大隅国の蒲生・祁答院連合軍であった。島津軍は吉田松尾城を前線の兵站基地として確保し、岩剣城の攻略のため、南東の白金之陣に島津義弘を大将に置き、はさむように北西に狩集陣を築き、島津義久を大将に置いた。岩剣城の搦手となる尾根筋を遮断するため、日当比良陣と惣陣を置いた。

3. 文献史料に見る「狩集陣跡」

『於岩剣御合戦之刻之事』(以下「岩剣合戦記」と略す)は、新納家に伝世し、現在県黎明館に寄贈されている。内容は天文23年(1554)9月12日から10月19日までの島津方から見た詳細な戦闘報告である。戦さの終盤である10月2日に岩剣城へ総攻撃をかけて平松川(現思川)で大激戦となり、島津軍は高樋川あたり(帖佐中学校)まで追いつめて、蒲生・祁答院の主だった50人以上を打ち取り、島津方の大勝利で戦さは終わった。島津軍が囲みを解いたので、岩剣城の守備兵は夜のうちに退去し落城した。

「岩剣合戦記」中の陣跡頻出回数は、以下の通りであり、狩集陣が19回と圧倒的に多い。平松川や平松の原に展開した伏兵の出撃拠点として活用されていたようである。

【陣跡記述頻度】

狩集陣・御陣19回、白かねの陣13回、惣陣宗陣5回、日当平陣2回、焼山4回、敵城(岩剣城)同城2回、

次に「岩剣合戦記」から戦闘の様子を一部引用する。戦国島津氏の総力を挙げての合戦であったため、守護の島津貴久も最前線の狩集陣へ出陣している。狩集之陣はまだ完成はしておらず、島津義久が普請を急がせている。焼山とは狩集陣と敵方岩剣城との間に横たわる丘陵地帯であり、お互いの小競り合いの場となっている。文面からは岩剣城方が狩集陣の麓まで出てきて、山焼きの煙や炎により島津方の陣を攻めているようである。(第2図参照)

(「岩剣合戦記」個人蔵)

史料1 岩剣城合戦記(天文二十三年九月十五日、御屋形様(島津貴久)狩集之御陣に御出なされ候而、山やかれ候、十六日、鬼塚吉内左衛門・黒木七兵衛於濱郭之山打死仕候、前之夜吉田衆石神名字之者足輕壹人、敵城岩剣の麓にて打死申され候、(略)若殿様(義久)狩集之御陣普請御させなされ候
十七日未の刻計、狩集之陣衆焼山に見え候敵を追払い、申の刻初迄の矢軍、帖佐よりも(岩剣城)麓まで敵続き候えども、由なく引き歸し候、(略)

4. 狩集陣跡の所在地・面積など

所在地: 始良市平松3976-1他5筆(地目: 山林) 小字城瀬 3976-1(面積: 112502㎡) 小字山口 5110-22、23、31、34、35

対象面積: 12万㎡ 規模: 全長約850m×幅約200m 標高: 246m(岩剣城[225m]より22m高い。)

土地所有者は始良市であり、現況の管理者は始良市農林水産部林務水産課である。主郭部は50から60年生の杉やヒノキの造林地となっている。尾根及び山頂部を中心に遺構の対象面積を求積すると、東端の鉄塔建設地から西端の主郭までの面積は約12万㎡となる。

5. 狩集陣跡の周辺地形

図2により狩集陣の南側地形を説明したい。急傾斜の山麓には、希望ヶ丘病院及び関連介護施設が並ぶ。その間を狩川が流れ、岩剣神社前へ達する。戦国時代の岩剣城下は小規模ではあったが、岩剣城山麓の岩剣神社を中心に集落が造られ、狩川を境に防御のための柵や城戸が設けられていた。

文献史料で見たように、岩剣城から進出した蒲生・祁答院連合軍は、狩集陣との間にある「焼山」で小競り合いをくり返している。狩集陣の南斜面は、急傾斜であり、尾根までは比高差約100～130mである。斜面は天然の深い谷が縦堀状に発達している。

岩剣城より南東では、白銀坂中腹に白金之陣を構え、島津義弘が大将を勤めた。合戦後の論功行賞により義弘は岩剣城の城番に抜擢されている。

6. 狩集陣跡の縄張

狩集陣跡の縄張について第3図により説明したい。狩集陣跡は東西約850mあり、城域は東端の曲輪9・尾根道部分と、主郭防御のための中央切岸・土塁群、そして西側の主郭曲輪群の三つに区分できる。

東端の曲輪9・尾根道部分

曲輪9の東端に119.9mの三角点がある。曲輪の中心は鉄塔建設により破壊されている。南東に尾根道が約200m延びている。この尾根筋にはNHK塔用のケーブルが埋設されているので、遺構としては破壊を受けている。途中北側斜面下に添う林道と接続する階段工が1か所ある。NHK塔の保守用の施設かと思われる。

中央切岸・土塁群

尾根上の階段入口に山神の石祠がある。猟師たちがここでお祀りをしたものか、「狩集」の地名由来に関係するものである。現在は階段工であるが、山城的にはここは斜面を急こう配に切り詰めた城郭施設である切岸(きりぎし)と考えたい。土塁5は地山であり、道は岩剣城から見えない北側を迂回している。土塁5を回り込んだ所に、難視聴地域用のNHK塔が設置されている。曲輪7・8は半月状に配置され、中央に自然の深い堀切が発達している。ここから主郭部へ上がるには、切岸1を上がるしか方法がない。切岸の南側斜面は削り取られ、横への移動を封じている。切岸は約80～90mの急坂であり、上からは丸見えの状態であり、弓矢や鉄砲の射線を確保しやすい。

西側主郭曲輪群

小さな踊り場である曲輪3を経て曲輪4に達する。ここが主郭部の東端となる。西側には曲輪1をめぐる土塁1が1m以上の高さをもって対峙している。曲輪1の内部は不規則に上中下段に分かれ、西端は土塁2と空堀1によって明確に曲輪を主郭たらしめている。曲輪1は長軸80m×短軸50mある。北側には曲輪5・6が尾根に添って小さく階段状に作られている。

曲輪1の形は横に長い亀甲型であり、土塁に囲まれた最も防御性に高い曲輪である。曲輪1の南側斜面には、堀切1とは別に小さな縦堀状の遺構が見られ、横への移動を防いでいる。曲輪2は東西に長さ約180mあり、小さく5段に分かれる。北西の段は土塁3ととらえた。

土塁3は土塁4及び空堀2が構成する城域の西の守りを補強するものであろう。空堀2はやや浅いが、南へ縦堀状に延びる。それと併行に土塁4も南へ伸びる。空堀2より西は隘路となり、やや広めの土橋状となる。

曲輪1・曲輪2の南側の緩斜面には、半月状の腰曲輪が6から8ヶ所観察できる。これが狩集陣の活動時期と一緒にあるかどうか不明であるが、緩斜面を上ってくる敵への防御施設の可能性もある。

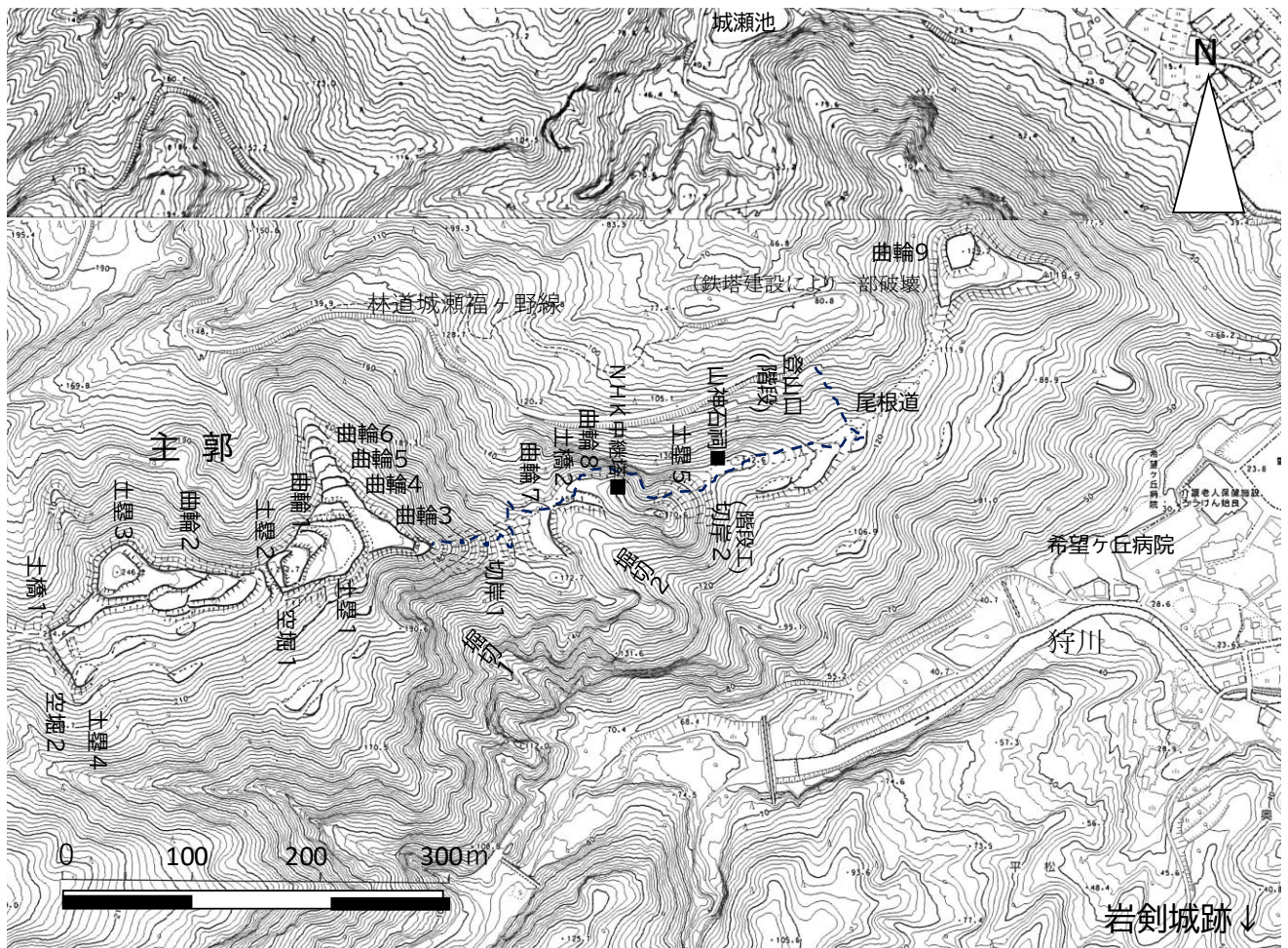


図3 狩集陣跡縄張図

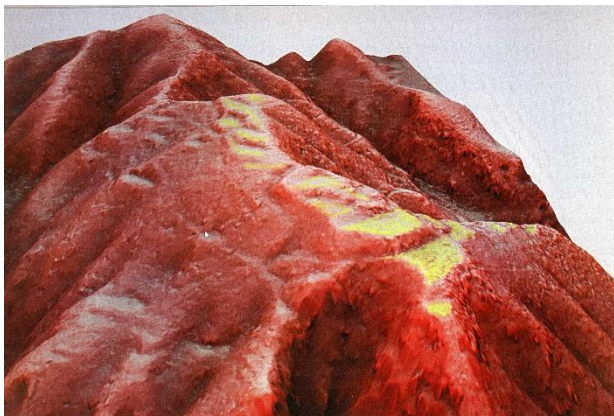


図4 狩集陣跡 3D 俯瞰図

(始良市赤色立体地図 2019 年に加筆)

この3D 俯瞰図は、狩集陣跡の特徴を良く表している。岩剣城よりも20m以上高い位置にあるため、敵情観察も可能であったとおもわれる。

南側斜面に同じ高度で小道が観察されるので、犬走状の施設の可能性がある。

7. 最後に

狩集陣跡は赤色立体地図の作成過程で偶然見つかった遺構である。現地調査を行い、確証は得ているものの、まだ考古学的な確認調査は行われていない。島津方の陣跡については、日南市教育委員会蔵の「高城陣構図」(第2次豊臣氏)記載の島津義久・義弘陣があるが、残存する陣跡としては「狩集陣跡」が唯一ではないかと思う。(会報『南九州の城郭』第43号「岩剣合戦における「狩集陣跡」について」2025より引用抜粋。)



写真2 切岸2 山神石祠